中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 4 巻 第 2 号（2005）37 ― 43 頁

これまでの研究活動と今後の展開 そして発達領域の展望

中京大学心理学部　小島　康生[注1]

Retrospective and prospective perspectives on my research activities and education

KOJIMA, Yasuo（School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666）

大学入学から講座決定までのいきさつ

筆者が大阪大学人間科学部に入学したのは 1988 年のことである。いまでこそ，「人間科学」という名称はそれほど珍しくなくなったが，当時はこの名を学部に冠したところは数えるほどしかなく，阪大の場合，心理学にとどまらず教育学，社会学，人類学など多様な領域のスタッフで構成されていて，広い視野から「人間を科学する」ことができそうに思えたところが，われわれ学生にとっての大きな魅力であった。

2 年間の学部教養時代を経て，3 年生に上がる時点で，講座（本学でいう "ゼミ" にあたる）を決めなくてはならないのは本学と同様で，筆者の場合，「比較行動論講座」を選ぶこととなった。その後，筆者はニホンザルの社会関係についてのフィールド調査をもとに卒業論文を書くことになるのだが，そのことについて述べる前にまず，講座決定までのいきさつを紹介したい。

筆者は，2 年生のある時期まで，心理カウンセラーを目指していた。当時は，臨床心理士の資格制度ができたところで，筆者のまわりにも，心理カウンセラー志望の者が何人もいた。筆者らが大学に入学した頃は，阪大にはまだ臨床心理学のスタッフが一人もいなかったのだが，たしか 2 年生になったときに，学部創設以来はじめての臨床専門の教員が赴任され，そのことも筆者らの臨床心理学熱をかきたてたのであった。ちなみに，そのとき赴任してこられたのは倉光修先生（現・東京大学）である。

さて，2 年生に上がったとき，筆者は，何の迷いもなく臨床の道へ進むものと考えていた。その気持ちが大きく揺らいだのは，2 年生の夏休み前後におこなわれた各講座担当教授による説明会に参加したときだったように思う。この説明会が催されるころには，学生の多くは，そろそろ進路を決めなくてはという意識を持ちつつあり，相当に長い時間をかけて（たしか何週かに分けて）の，この説明会にも，ほとんど全員が参加し，ひとりひとりの先生方の説明に熱心に耳を傾けていたように思う。

比較行動論講座の担当教授でいらした糸魚川直祐先生はたいへん魅力な方であった。恥ずかしながら，お話になった内容はいっさい覚えていないのだが，目を輝かせサルの研究の話を熱心にされる様子は，ひときわ強烈な印象を筆者に与えた。そしてこのことが，講座選びの最大の原因となったのである。

もうひとつ，比較行動論講座を選んだ理由がある。その当時，筆者は動物学に関係した本を何冊か読んでいて，なかでも河合雅雄氏の本（たしか「サルの目ヒトの目」というタイトルだったように思う）を読んで心躍らされたのである。臨床心理学の第一人者で，筆者ら心理カウンセラーを目指す学生にとっては憧れの人ともいえた，あの河合隼雄氏が雅雄氏の弟であるという事実に驚くと同時に，二人が，分野こそ違えども，それぞれ独自の立場に立脚して「人間」の本質，本性を見抜こうとされている点にも深く感銘を受けた。

河合雅雄氏をはじめ，霊長類学に関係した本を何冊か読み進めていくうちに，なるほど「動物としてのヒト」という視点もあるのかと新鮮な感動を覚え，そのこともエソロジーを勉強しようと思い立った理由のひとつとなった。フィールドに出て自分のこの目でみたものを丹念に記録し，そこから新たな発見をめざそうという方法論も魅力的であった。

注 1　ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp

"サル漬け" の生活がはじまる

比較行動論講座では，講座に入った学生全員が必ずサルの研究をしなくてはならないというのではなかった。じっさい，同期の仲間のなかには自閉症児施設や幼稚園での子どもの観察をもとに卒業論文に取り組んだ者もいる。筆者の場合は，ともあれニホンザルをやろうとはじめから心に決めていたのだが。

ところで，講座の学生やスタッフは，講義室や研究室のある "本館" と呼ばれる建物とは別棟の，"別館"（正式な名称は「比較行動実験施設」）と呼ばれる建物にいることが多かった。別館では数十頭ものニホンザルが飼育されており，スタッフや先輩たちがそこで実験や観察をおこなっていた。

動物を飼育している研究室はどこもそうだが，一年中一日として休むことなく，誰かが飼育オリの掃除やエサやりをしなくてはならない。筆者が講座に入った当時は，ひと月に2回ないし3回の当番が回ってきて，土日はもちろんのこと，盆や正月でも，たまたま当番が当たると，1時間半から2時間もの時間を要する，この作業をしなくてはならなかった。教養の学生のあいだでは，「比較行動論講座といえばサルの世話」という噂が広まっていて，それがいやで他の講座を希望する者もいたほどであったが，結局，筆者は中京大学に赴任する2002年まで，12年間ものあいだ，サルの世話に携わったことになる。

講座に入ると，まずは行動観察法を徹底的に学ぶこととなった。ワン・ゼロ法や点観察法，全生起行動記録法など，基本的な手法をひととおりマスターすると，今度は本格的にサルの観察を計画することとなった。3年生の6月ごろには，6〜7頭からなる集団を約1ヵ月にわたって継続観察した。仲間と協力しながら，予備観察，行動目録・データシートの作成，本観察と順調にデータワークをすすめ，かなりしっかりしたレポートを書いたように記憶している。いま思えば，授業のあいまの観察はかなりハードだったが，この観察こそが筆者の研究生活のスタート地点であり，たいへん思い出深い。

サルの個体追跡観察は，想像以上に新鮮な経験であった。われわれの周囲は驚くほどたくさんの情報に満ち溢れ，しかも，それらの情報に目移りするあまり，肝心なことを見落としがちである。一度でもしっかりとある対象を見つめ，本質を知ろうとしたことがあっただろうか，そんな思いをこの個体追跡観察から抱いたものである。

比較行動論講座でサルの研究をするといっても，フィールドはひとつではなかった。大阪府箕面市の餌付け集団か，岡山県勝山町の餌付け集団，もしくは実験施設で飼育されている個体を用いての実験や観察か，この3つが選択肢として準備されていた。そして，筆者は何の迷いもなく，勝山町の集団を卒業研究の対象にしようと考えた。せっかくやるなら屋外のフィールドで，それも一番歴史のある勝山町の集団をと考えたのである。

勝山町は，岡山県北部の真庭郡というところにあり，車で行くと大阪から約2時間半の距離にある。通称，勝山集団と呼ばれているこの集団は，1958年に既出の糸魚川直祐先生を中心とするグループによって餌付けされ，その後途絶えることなく研究が続けられてきた伝統のある集団であった。筆者が研究を始めた頃には，200頭あまりの大所帯であったが，なにより特筆すべきは，メンバーの名前や血縁関係がすべて把握されていることであった。しかも，どの個体が何年に子を産み，そのうちどの個体が集団に残り，また集団を去ったか，そうした細かい情報がすべて揃っていたのである。

勝山集団で卒業研究をすすめることが決まると，門外不出とされる家系表（人間でいうなら家系図のようなもの）を渡され，それをみながらの個体識別がはじまった（糸魚川，1997に家系表の一部が記されている）。個体識別とは，メンバーの顔と名前を正確に把握することである。人間が相手ならいざ知らず，サルの顔を覚えるなど本当にできるのかと，最初は途方にくれることも多かった。このハードルをクリアしないことにはデータ収集ができないというプレッシャーのなかで，個体識別がすすめられていった。

ところで，サルが日中を過ごす餌場付近には，実験所と呼ばれるロッジ風の建物があり，これは炊事や洗濯，寝泊りもできる，たいへん恵まれた施設であった。とはいえ，大学での講義もあるため，そう頻繁に訪れることもできず，また，相手は生身の生き物なので，必ずしも餌場にいつもいてくれるとも限らなかった。山の中に木の実や果実が豊富にある秋口などは，餌場に下りるより山中を遊動したほうがたくさんの食物にありつけることもあり，数日つづけて集団が餌場に現れないこともあったほどである。それでも，1泊2日ないし2泊3日程度の滞在をひとつきに2，3回繰り返しながら，約半年の時間をかけて個体識別を完了した。最終的には，樹上

にいるのを双眼鏡で見ただけで，また何十ｍも前方をほんの一瞬横切っただけでも，その個体が誰なのか把握することができるほどまでになった。

研究テーマの決定

結局のところ，学部，修士の４年間にわたって，ニホンザルの研究に携わることになったのだが，筆者の研究上の関心は，子ザルの親・きょうだいとの関係，あるいは同じ集団で暮らす仲間たちとの関係であった。人間と同様で，同じ時期に生まれた個体であっても，彼らは成長するにしたがいそれぞれに異なった多様な社会関係を展開していく。個体差を生む背景が何なのか，どういう経路でそうした個体差が生まれていくのか，そのようなことを調べたいと考えたのである。なかでも筆者が注目したのは，きょうだいの存在の影響であった。これには，筆者が一人っ子として育ち，幼い頃からきょうだいがそばにいないことをさまざまな局面で意識する機会が多かったことも影響している。きょうだいがいるとはどういうことだろう，きょうだいがいるといないとでは何が違うんだろう，そんなことをよく考えたものである。

卒業論文，修士論文の詳しい成果については，小島（1996）や Kojima（1998）をご覧いただくとして，サルに携わった４年間で得たことは，観察研究には並大抵ではない時間と労力が必要だが，確実に説得力のある成果となってはねかえってくるということだろうと思う。そして，筆者は現在もこの信念に沿って研究活動を続けている。

勝山での生活

実際のデータワーク以外の面でも，勝山での生活から学んだことはじつに多い。ひとつは，研究対象の生活する，その場のなかに自分も入りこんでみること，いわば現場意識の大切さである。われわれは，季節によってサルが餌場に下りてきてくれないときに，よくこちらから山へ分け入り，山の中で集団とともに過ごすことがあった。筆者の先輩の一人は，「サルが食べるものは何でも自分も一度食べてみる」というのが持論で，木の皮をひんむいて食べたり，ふつうならすっぱくて叶わない野いちごをうまそうに食べてみたりして最初は驚いたのだが，こうした「共にある」感覚というのは，研究対象をみつめる目を養ううえでとても大切なことである。

サル研究の経験で学んだもうひとつのことは，常時餌場を管理し，日頃の様子などを知らせてくれる地元の人たちとの関係である。こちらは，いわば研究目的でサルの観察をしているわけだが，われわれがいないときの餌場の管理にあたっている地元の方々との関係は，そうして気持ちよく研究活動をおこなううえで何より重要なのである。ときには研究者側の考えと，そうした地元の人たちの思いがかみ合わないこともあるのだが，そこでの調整やかけひき，根回しといったものが，満足のいく研究活動を続けていくうえで，いかに大切かを，４年間のあいだにいやというほど学ばせてもらった。どこの世界でも，人間関係はすべての基本だと実感したものである。

博士後期課程への進学－サルから人間へ－

修士課程を修了すれば，そのまま博士課程に進学するのが当たりまえという雰囲気のなかで，博士課程への進学は，筆者にとっていわば必然的なことであった。ただ，博士課程進学後は，サルの研究から足を洗い，人間の研究に移行しようと心に決めていた。周囲の人たちからは，サルの研究では将来の就職に苦労するぞ，というようなことも言われたが，別にそのことを意識して，サルの研究をやめたわけではない。この先３年間さらにサルの研究に没頭しようというほどの情熱はすでになかったし，最終的にはサルではなく人間の研究を，という思いがあったのである。いわば潮時だろうという意識が強かった。

それまでと研究対象ががらっと変わることもあって，まずは文献を集め，最新の情報を入手するところからはじめなくてはならなかった。テーマは，引き続ききょうだい関係と決めていたのだが，何より動物に関連する論文しか読んでこなかったので，ゼロからのスタートであった。最初にやったのは，国内の研究動向を確かめることであった。糸魚川先生に代わって当時研究指導を担当していただいた南徹弘先生の助言も得ながら，まずは日本心理学会，日本発達心理学会の発表論文集を過去５年程度さかのぼって調べ，自分の関心に近い発表をしらみつぶしにチェックした。また，国内の学術誌だと発達心理学研究，海外のものだと Child Development，Developmental Psychology，International Journal of Behavioral Development，Infant

Behavior and Development などを，これまた過去5〜10年分ほど調べ，関連する論文を読みあさった。当時，助手としていらした中道正之先生（現・助教授）が，「自分が大学院のころは，年間100本ペースで論文を読んだ」とおっしゃるのを聞いて，たいへん刺激を受けたのを記憶している。少しずつインターネットや文献検索エンジンなども普及しはじめ，論文を収集するのに役立った。

さすがに年間100本というペースには及ばなかったが，博士課程1年の夏休みあたりまでは，論文を調べながらの研究動向の確認にすべての時間を費やした。そうしたなかで，少なくとも海外では1980年ごろからきょういだい関係の研究がおこなわれ始めたことや，国内ではきょうだい関係の発達研究がほとんどないに等しいこと，家庭訪問による観察研究が一般的であることなどがわかり，少しずつデータ収集のイメージが出来上がりつつあった。

研究協力者を探す

海外の著名な研究者の書いた論文を読むと，新聞の地方版などを通じて協力者の募集をするというのがかなり一般的におこなわれていて，しかも協力者には相応の謝金が支払われるのが常であることがわかった。だが，筆者のような貧乏大学院生にはとてもそのような資金もないし，もっと別の手段を講じるほかなかった。結局のところは，今でも日本人の多くがやるように，縁故者をたよりにするよりほかなさそうだと気づき，まずは親や親戚をたよりに，協力者を探し始めたのであった。探していたのは，乳幼児のお子さんが2人いらっしゃるご家庭か，これから2人目のお子さんが生まれるというご家庭で，一家庭見つかれば，そこでご近所さんを紹介していただくというような方式も取り入れながら，とにかく必死になって協力者を集めた。奈良，和歌山，兵庫，滋賀など，近畿一円，何時間でもかけてどこへでも出かけたものである。

家庭訪問で気をつけたこと

家庭訪問をはじめるにあたってなにより心配だったのは，独身男性である筆者が，夫が出勤していて不在の平日の昼日中に家庭を訪れ，母子の遊びの様子をビデオカメラに撮影して帰って行くという，どう考えても怪しげな，この研究に本当に協力してもらえるのかということであった。十分な研究費があれば，それでも謝金を支払ってきちんと契約のかたちを取ることも可能だし，その意味でも研究費をきちんと調達することの大切さも痛感したのだが，そのような資金もないままにどのように相手の方にうまく受け入れてもらうか，最初はかなり思案したものである。結局のところ行き着いたのは，お金がないのは仕方ないこと，それでもきちんと誠意をもって相手の方と付き合うという，ごく当たりまえのことであった。たとえば，家庭訪問をする時間をきちんと取り決めることや確認の電話を入れること，風邪を引いたときはお子さんに風邪をうつすことを考え訪問を延期すること，決められた時間にきちんと伺うこと，さらには，なるべく学生風の質素な服装で伺うこと，学会発表を終えるたびに発表内容を平易に編集して報告すること，などを心がけた。意外に喜ばれたのは，学部，修士時代に取りためたサルの赤ちゃんや親子のサルの写真を引き伸ばして渡すというものであった。とにかくお金がない分，使えるものは何でも使おうと考えたのである。データワークはまる2年ほどかけておこない，すべてのデータが分析に使えるわけではなかったものの，最終的なのべ家庭訪問回数は130回を数えた。

学会発表のこと，投稿論文のこと

研究成果を発表する場としてもっとも一般的なのは，学会であろうと思う。筆者の場合，修士課程在籍時に少なくとも一回は学会発表を行うことが修士論文提出の条件とされており，修士2年のときの日本動物心理学会での発表が，いわゆる「学会デビュー」ということになる。博士課程進学後も，学会発表は順調にこなしてはいたのだが，いっぽうで少し物足りないという感じも持ちつつあった。学会発表の場で他の研究者から指摘を受けるのはもちろん有益であるし，以降の研究活動の指針になることもたしかなのだが，心理系の学会だと発表をおこなうにあたってとくに審査が必要なわけではなく，いわば手さえ挙げれば発表できてしまうところが物足りなさの一因であった。

研究成果を学術誌に掲載することの必要性を感じたのはその頃のことであった。御存知のように，わが国には，学術振興会特別研究員という制度がある。特別研究員に採用されると，毎月一定の給与がもら

えるほかに，研究活動に必要な研究費もまかなわれる。当然のことながら，筆者も何度か応募したのだが，残念ながら一度も採用されることはなく，その原因のひとつは，学術論文の業績がほとんどないということにあるのだろうと思い当たった。そのような意味でも，何がなんでも論文業績をあげなくてはというモチベーションがおおいに高まった。

また，よく考えてみると，研究成果を学術雑誌に投稿し掲載することは一見地味ではあるが，後世まで文字媒体として残ることになるのだし，時間・空間を越えて多くの研究者の目に触れるという点でも，学会発表よりメリットが大きいのではないかと感じた。じっさい，論文掲載が認められると，国内外のさまざまな研究者から，抜刷りを送ってほしいという手紙がたくさん届いて驚いたものである。

博士課程を修了して

博士論文をなんとか3年で提出し，大学院を修了しても，就職先が簡単には見つからず，しばらくはポスドクとして非常勤講師などをしながら食いつないでいくことが多いと聞く。筆者の場合は，幸運にも，大学院を修了したまさにそのときに，非常勤研究員というポストが新設され，これは，ポスドクの学生が就職を決めるまでの期間，研究活動に没頭し，成果を挙げられるよう，金銭面の面倒をみてくれる，たいへん有難い制度であった。筆者の所属していた比較行動論講座には附属実験施設が併設されていたこともあり，単独でポストが1つ割り当てられ，運良く筆者がその研究員の第一号となったのであった。助手の方がなさっていた仕事をサポートしたり，学生の指導をしたりということもあったが，時間的な拘束も少なく，十分に研究に没頭できたのは良かった。

大学院を修了して真っ先に考えなくてはならないのは，博士論文の成果をいち早く学術誌に発表することであった。多くの人がそうだと思うが，学位論文の内容を投稿論文としてまとめるときには，かなり小分けにして複数の雑誌に投稿するか（ただしこの場合は，雑誌のレベルを下げることが多い），なるべく小分けにはせず，ある程度まとまったかたちでレベルの高い雑誌に投稿するか，選択を迫られる。おそらく就職のことを考えると，「質より量」との判断から，前者を選択することが多いだろうが，筆者の場合，期限つきではあったが，給料もいただけることになり，少し思い切ってレベルの高いところへの投稿を目指すことができた。

論文はやはり海外へ投稿しなくてはという思いがあったので，全体を2つに分け，いずれも英文でまとめようと考えた。当時，筆者の周りを見渡してみても，「論文を書いて投稿する」ということをあまり重視しない風潮が強かったのだが，既出の中道先生から，「研究成果は鮮度が落ちないうちにまとめて投稿し，きちんと他者から評価を受けるのが当たりまえだ」というアドバイスを受け，論文執筆に取りかかったのである。投稿した論文の掲載が認められ，じっさいに雑誌に載っているのをみたときの喜びはたいへんなものであった。

論文指導について

論文は，自分の思いどおりに書いて，誰のチェックも受けずそのまま投稿というわけにはどうしても行かない。最初の頃はとくにそうである。指導教員や先輩たちに目を通してもらって助言を得ながら，ようやく投稿へとこぎつけることになる。これはおそらくどこの大学院でも同じだろうと思う。筆者の場合，とくに多くの助言を得たのは，中道先生であった。中道先生は，こちらが仕上げた論文をとにかく丁寧に読んでくださり，何より数日でコメントを返してくださるのが有難かった。筆者もいま，ゼミの学生から卒業論文やらレポートやらの文章を受け取るが，この「迅速」，「丁寧」がなかなか難しい。学生のモチベーションを保つためにも，レスポンスを早くすることは何より大切だと考えている。

論文指導もふくめ，研究指導のありかたはとても重要だと思う。ひとつひとつ進むべき道を指示するのもひとつのスタイルだし，いっぽう，ほとんど具体的な手出しはせず勝手にやれといったスタイルの指導もありうる。筆者の場合，既出の糸魚川先生はどちらかといえば後者のスタイルで，論文をみてもらおうと原稿を渡しても，返却された原稿をみると，ページ一面に「×」や「？？？」と記されていて，たいへんなショックを受けた記憶がある。しかし，どこが「×」なんだろう，どこが「？？？」なんだろうと考えるうちに，画期的な改善点がみつかることもあった。学生の性格や相性のようなものも，研究指導には大きく作用するのだろうと感じる。

講義を受け持つ

指導教員の南徹弘先生は，博士論文を提出するまでは非常勤講師を認めないという方針の人であった。本来，他校での非常勤講師の経験は，就職にあたっては教育歴として大きな意味を持つ。じっさい，他の講座に所属する同級生のなかには，博士課程に入るとせっせと専門学校や短大，大学などで教育歴を積んでいる者もいたのだが，筆者としては，博士課程の3年間を徹底的に研究に没頭できたのは本当に良かったと感じている。

以上のような事情もあり，筆者が教壇に立って講義を担当するようになったのは，大学院を修了したのちのことであった。最初は看護系の専門学校で心理学や人間関係論の講義を担当することになったのだが，とにかくみんな話を聞いてくれない。これには本当に困り果てた。別におしゃべりをするわけでもないのだが，みな内職をしたり居眠りをしていたりで，ひどいときには，40名ほどのクラスの8割ぐらいが眠っているというようなこともあり，これはかなり屈辱であった。

心理学部あるいは心理学研究科の学生を相手に講義や実習をおこなういまの状況と，教養科目のひとつとして心理学の講義を受講している学生への講義とを一緒にすることはできないが，全く聞いてくれない学生に話を聞かせるためにあれやこれやと工夫を凝らし試行錯誤を繰り返した経験は，いまの講義にもきっと生かされているのではないかと思う。もっとも，ただ面白いというだけでなく，筆者の場合，発達心理学という学問の魅力や研究の面白さを伝えるのは，本当に難しいと感じる。

今後の研究の展開

以上，筆者のこれまでの短い研究生活について，学部，大学院時代を中心に振り返ってみた。研究内容の詳細についてはあまり触れず，それぞれの時代にどんなことを経験してきたか，どんなことを感じたかを，ややエッセー風に綴ってきた。それを踏まえて，いま現在の研究上の関心その他について述べてみたい。

大学院を修了したあとは，きょうだい関係そのものというよりも，きょうだいである子どもを育てる親の視点からの研究を続けている。具体的には，第二子を妊娠中で，これから二人目の子どもを生み育てようとしている親，あるいは第二子を産んでまだ間もない，きょうだい育てをはじめたばかりの親を対象に，調査をすすめてきた。そのなかで，子どもが二人になるということで経験されるさまざまな問題，とくに母親の育児ストレスや心理的葛藤，そして家族全体からみた場合の，きょうだい育てへの適応・不適応の背景要因などが，少しずつではあるが明らかになりつつある（詳しい成果は，小島・入澤・脇田，2001，2003）。いまは，これをさらに発展させ，二人育てへの移行にともなう問題の解明や不適応状態の予防策などを考えていきたいと考えている。たとえば，第二子を妊娠中の親を対象に，二人育てへのスムーズな移行を少しでも手助けできるような教育プログラムを作れないか，というようなことである。実現には少し時間がかかりそうだが，公的機関や病院などと連携をはかりながら，まずは実態を調査するところからはじめようと考えている。

いっぽう，どうしても自分のルーツはフィールド観察だという思いも強く持っている。質問紙やインタビューのような手法もたしかに有効なのだが，じっさいの生活の現場で親子，家族がどのようなかかわりをし，それが子どもの発達とともにどう変化するのかというようなことにも関心を寄せている。数年前から続けている家族屋外観察はその一貫である。すでに，ショッピングモール，横断歩道などで観察を実施し（小島，2001a，b），現在は，スーパーでの観察をすすめているところである。フィールドに出ていろいろな場面を観察してみると，これまでの家族心理学や発達心理学がいかにその人の暮らす現場というものを軽視してきたかということを実感する。また，家族関係というものは，そうした多様な文脈に埋め込まれるようにして成り立っていること，その全体像こそが家族の実態なのではないかということを強く感じる。この視点を生かして，新しい家族発達のモデルを構築したいと考えている。

最後に

御存知のように，心理学研究科のなかでも発達領域の歴史は，他の3領域に比べはるかに短い。当面の筆者の仕事は，講義や研究活動を中心に，発達研究の魅力を学生に伝えていくことだろうと考えている。そして，まだまだ短い研究者人生だが，そのなかで学んだことを生かし，有能な人材を育てたい。

本年1月に研究科特別記念事業の一環としておこ

なわれた専攻科別のあつまりでは，修了生がまだほとんどいないこともあって少し寂しい思いをした。しかしそれと同時に，4 領域のひとつとして発達領域の柱を他に負けぬよう着実に育てていかねばという意気込みと責任感を感じたのも正直なところである。10 年後，20 年後には，たくさんの修了生が各方面で活躍し，このような場で寂しい思いをしなくて済むよう，これからの頑張りが大切だと切に考えている。

引用・参考文献

糸魚川直祐（1997）サルの群れの歴史：岡山県勝山集団の 36 年の記録　東京：どうぶつ社

糸魚川直祐・南　徹弘（共編）（1998）サルとヒトのエソロジー　東京：培風館

小島康生（1996）未成体ニホンザルの社会関係に及ぼす兄姉の影響　霊長類研究，12，11-19

Kojima, Y. (1998) Continuity of affiliative relationships among infants and juveniles in a free-ranging group of Japanese monkeys (Macaca fuscata). *Psychological Reports*, 82, 691-700.

Kojima, Y. (1999) Mothers' adjustment to the birth of a second child: A longitudinal study on use of verbal and nonverbal behaviors toward two children. *Psychological Reports*, 84, 141-144.

Kojima, Y. (2000) Maternal regulation of sibling interactions in the preschool years: Observational study in Japanese families. *Child Development*, 71, 1640-1647.

小島康生（2001a）横断歩道通行中の母子の関わり　日本発達心理学会第 12 回大会発表論文集，p.2

小島康生（2001b）外出中の家族を対象とした親子の関わりと夫婦間の役割調整－子どもが 1 人の家族と 2 人の家族の比較を通して－　家族心理学研究，15，25-34.

小島康生・入澤みち子・脇田満里子（2001）第 2 子の誕生から 1 ヵ月目にかけての母親－第 1 子関係と第 1 子の行動特徴　母性衛生，42，212-221

小島康生・入澤みち子・脇田満里子（2003）第二子妊娠期間中における母親－第一子関係　母性衛生，44 巻，2 号，289-299